

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和5(2023)年
3月号
通巻631号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和5年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



若き日の法主夫妻のガラス乾板による写真。場所は庄山らしい。「神通力如是」の書かれた昭和16年に前後する時期か。

再録 昭和32(1957)年8月1日発行 ※『大倭主義』第21号より

宗教家の誤りたる狙い ～法主談話～

※『大倭』より改題

法主 矢追日聖 (満45歳)

宗教ばかりという言葉をよく耳にするが、世間を見渡すとまさしく百花咲き乱れたように宗教と言われるものがある。町に出て田舎に入っても大抵あますなき隅々まで、その手の届いている巧妙さには驚くの外はない。あたかもそれは市町村会議員の選挙運動のように、衆生済度を唱えながら信者の獲得、公明選挙を標榜しながら一票の同情を乞う、こうしたものが現在の向きの利巧な行き方かも知れない。

宗教だの信仰だのと誰でも心安く言い放っている現在ではあるが、それは一体何だろうか。今のような世知辛い世の中になぜ宗教のようなものがあるのか。また、なぜ今の世に宗教なるものを必要とするのか、などというようなことを聞き直って聞けば少なからず面食らうだろう。

こんな問題は専門の宗教学者に任せておけば好いたように銘々言ってくれるから、ここではそれよりも一步深く踏み込んで、実際にこの宗教を掲げて現在立っている宗教家の在り方について目を向け、それと同時に世間の迷い悩める人々に、最も正しく宗教家を観る眼鏡を与え、邪教邪道に陥らないよう注意報を発しよう。

まだ寝たらんのか

既成宗教家よ

千年、いや千年以上も古い昔から我らの住む日の本に根を下ろし、我らの血の

一滴の中まで染み込んでいるはずの幾多の宗教が、この最も必要とする今の時代に何をほんやりと寝ぼけているのだろうか。かつての特権階級に横抱きにされ(中には継子いじめをされた者もあるが)、お乳を飲んで今日まで生きながらえた甘き夢を追っているのじゃなからうか。

森敵なる背景に設けられた社殿、天に聳ゆる堂塔伽藍、こんなものが一体宗教の何の役に立っているのか。あたかもそれは病床に横たわり死期を待つ古老の姿にも等しい感を与えているのではないか。これらは上手に時の天下の袖の下にもぐって闇取引で出来たものもあろう。中には聖者の徳望によって出来上がったものもあつたであろう。一体今時の宗教家に、こんな広大な社殿伽藍などを、その徳望によってせめて維持だけでもする者があるとすれば不思議なくらいだ。

多くの宗教家が、この大きな脱穀から出るまいとかじりついているがために、宗教を忘れて建物境内の護持だけを知っている。今や経済的の嵐が昔の兵火のように一刻一刻この殿堂に迫りつつある。

大倭は起床の太鼓を打つ。目覚めた者から寸時も早くこの邪魔な殻を捨てて、宗教家たるの正しき姿に戻ったらどうか。教祖開祖様達は泣いてござる。甲羅に合うた穴を掘る蟹にさえ笑われるじやないか、もう昔の甘い夢を忘れて目を覚ます時が来たようだ。

やっぴり御本尊は金かいな

時代の産物か寄生虫かは知らないが、秋の夜空に輝く星の如く宗教家か神さん屋か拝み屋か、何とまあその数の多きことよと、昔の聖者覚者は嘆いておられるだろう。だが誰でもよい、その中に

たとえ一人でも真の宗教家があれば結構なんだ。自然の法から観てもそうでなければならぬ。毒茸の野に山に群生する時には、必ず本物の松茸が出る。偽物が多くあればあるほど本物の値打ちが出るのが当たり前のことなんだ。

既成宗教から出ている宗教家の多くは学識もあり、伝統もあり、人格的には立派な人々ではあるが、およそ衆生済度、特に現代にあつてはそれは無能に近い。

換言すれば忠実なる堂守りか、高等葬式屋の線を出ないのではないか。もし神社の官司なども宗教家として扱うならばこれも似たり寄つたりの存在と言える。

彼等の根本的な狙いは、如何にして上手に人々を騙し金銭を巻き上げようかという所にあるからね。しっかりと眉に唾をつけてかからんと知らないうちに騙されていますよ。神職や僧尼などはそう悪質な者は少ないが、やっていることは店舗を張つた商人と変わらない。よく見給え、社殿や仏閣、奉斎神や諸仏菩薩像、こうしたものを利用して上手に客を満足させて儲けていなさる。お札一枚、それも上下と価格が違う。祈祷でも等級が定められている。仏さんを拝観するにも、さらに生きた管長さんの顔を御簾越しに拝むにも定価がある。これらは興行に等しいのだから罪にはならないが、神意とか教祖の御心に矢を向ける反逆的行為とする罪は免れないであろう。

発展している宗教と言えば、今時の人は口を揃えてまず広大な殿堂を構え、巨万の財産を持ち、幾百万の信者を擁している宗教団体を指さして答えるであろう。世間の人々の大多数がこうした認識でおるために、宗教家自身も己の歩む道を忘れて、その方向に欲の爪を伸ばすことになる。上がり物の多い神社仏閣に権利金のついていること

や、宗派教団内に派閥が出来て幹部の椅子を取り合い争いを起こしている現実がある。政治家の国会乱闘騒ぎも至極こもつともなことではないか。およそ宗教家に縁のない、そして宗教家としてのその使命や人格などを完全に無視しような、くだらない宗教法人法のようなものが制定されたのも仕方あるまい。悲しいことだが、この法の生命のある間は真の宗教家が出ないということにもなる。

日聖が終戦直後、大阪の繁華街でMP(エムピーIIアメリカ陸軍の憲兵)ににらまれながら街頭布教していた頃は、宗教家の服装をつけている者が殆ど見えなかったが、今では月の一日か十五日など、町を歩けばさういほど何処でも見当たった。これらは神さん屋か、拝み屋の種類でこれがなかなか恐ろしい。いわば元要らずで大儲けし、労働人様には偉く見てもらえると望むような御仁、あるいは社会の生存競争に敗れた落伍者の群の中から這い上がった速成栽培式の者が多くある。彼らは人の弱みにつけ込んで巧みにその鮮血を絞る悪鬼に等しき存在なのだ。金品のより多く供出する者を最も偉い者としておだて上げ、貧困者は彼らの求むる所ではないようだ。

宗教としての線を外した行き方、換言すれば、邪教的内容を持つ者は、その反映として包めどもそれが現われてくるものだから、世の人は活眼を開いて正邪の区別をはっきり掴んでほしい。これは教理の正邪の問題ではなくて、宗教家としての実践の在り方についてであることを断っておく。

素人鑑定法

素人が先ず鑑定するに役立つ邪教的と言える方面のあらましを言ってみよう。

(イ) 差別的に扱う所

宗教家は何処までも無差別平等、普遍的愛情がなければならぬ。

(ロ) 金品を搾取的に強要する所

救いを求めて来る者から金品を要求する(こ)とは本末転倒である。

(ハ) 寄付金及びその人の名前を大字にして人目に見せる所に示せるような所

このような事をするのは寄付の後続者を求める手段であって、一度公衆に見せた以上は、寄付者の陰徳功徳が消えてかえって神意に反し不幸を招く場合が多い。

(ニ) どんな難病でも治ると言いふらす所

我らは天地の大慈悲によって生かされている。神は生まれたとたんに死を宣告している。神の定めであれば死ぬし、不養生から起る病なれば治療養生のよろしきを得れば治る。

(ホ) 信仰すれば儲かると宣伝する所

信用と努力が欠けていては駄目である。宗教的に精神の練磨を怠らず身に徳をつけることが第一義であって、富は徳に応じ求めずとも集まって来る。

(ヘ) 神さんが降って人助けをすると言う所

高級霊は人身には降って来ない。霊格の高い者には靈感(波長)によって神示は授けられるのであるが、下等霊、特に畜生霊は人身に憑ることもあるが、多くの代さんは畜生霊によって特殊精神分裂症を引き起こしている状態だから騙されないよう注意が肝要である。

(ト) 金品を多量に供えた者にこ利益が多いと言う所

神霊は物質の要求がない。但し、喜びの表現としての物品には限度がないが、物とこ利益の交換は出来ないことだ。

(チ) 外の宗教に変われば罰が当たると教える所

信教は自由である。安心立命に導くのが宗教本来の使命であるのに、こんなおどかしは、信者の牽引策であるからその手に乗らないように注意すること。

(リ) 医療を受けてはならぬと教える所

医療も元は神意より発し仁術である。医を無視し神に頼って死亡せる者も多い。神意に逆らう行為である。

× × × ×
以上のような問題は一応これで打ち切ることにしよう。

宗教家の持つべき宝物は……

宗教家の今日課せられた大きな役目は、社会人の一人一人の心の鎮定に向かう所にある。心の安定は社会平和の根本である。見よ、現実の闘争化した社会の実情を！ 宗教家たる者、物質に執着せずして、一生にたとえ一人たりとも完全に救済出来得たならば宗教家としての大成功である。目的はただこれ一つのみ。

宗派教派の優劣を競う宗教家、特定の信者を擁したい宗教家、立派な社殿、堂塔を欲する宗教家、資本家の袖にすがりたい宗教家、こうした肚のない尻の穴の小さい輩はあつてかえって邪魔になる。さっさと宗教界から足を洗って帰俗すればよい。

宗教界の黎明はこうした時に訪れるのである。日聖はまだ生かされている。余命いくばくもないが、ひとたび日聖が土に遺骸を埋めた時に、日聖の足跡は必ずや時代の闇を照らす光明となるだろう。昭和三十年五月十五日記

(本紙既刊より転載)

こもれる魂魄の地を訪ねて (第53回)

沖繩を訪ねて

杉本 順一

私の計画にはなかった今年の2月19日〜22日(3泊4日)の沖繩旅行が実現した。

お父さんも81も過ぎたから元気なうちに家族旅行をしようと娘2人にさそわれた。旅行プランは2人に任せて、体調だけは注意しといて、とのことだった。沖繩か？この島のことは70年前小学5年のことだったと思う。実家のすぐ近くに町で初めて映画館が出来た頃の事である。

映画『ひめゆりの塔』(昭和28年1月9日の作品)を見た時、心はずんと何かが沈んでいった。

そして今度は昭和46年7月17日、映画『激動の昭和史 沖繩決戦』が作られた。市内の映画館で上映されると知って、なぜか法主さんにこの映画を見に行きませんかと声を掛けてしまった。法主さんはすぐにOKでした。法主さん、鈴木母さん、邑の小学5年生の女の子と私の4人で見てきました。あれから50年、私にとっては沖繩は縁遠いところだったが、死ぬ前に行ってみたいなと思っはいた。今度は娘たちからの声掛けだ、行くことにした。私は観光スポットに何の興味もないのは、娘たちも分かっているはず。

19日になって、雨の伊丹空港を時間遅れで出発。飛行機が雨雲の上に出ると青空。しっかりとマスクはしていました。

無事那覇空港に着陸した。早速予約しておいたレンタカーに。娘2人が運転手。カーナビに2人は悪戦苦闘(我が家の車はカーナビがない)。

●最初に訪れたのは浦添(うらそえ)城跡であ

った。いきなり「タメトモココニアリ」(為朝ここにあり)と感じてきた。法主さんの前世のお一人が源為朝だったことは理解していたが、いささか出てき方が唐突である。私の屁理屈よりも『日本の神々、神社と聖地』¹³⁾(谷川健一編 白水社)の一部分をお借りする。160頁「王権儀礼の本義」から

『……浦添も『おもろさうし』には「うらおそい」とある。「浦襲ひ」の意で、やはり琉球の行政の中心地であることを表わしているという。琉球の五王統のうち最初の三王統は、それぞれ最初の王が浦添にいて王位についたように『中山世鑑』などでは伝えている。第一王統の祖の舜天王については、源為朝と大里按司の妹の子で、父の為朝が去ったあと浦添按司になり、天孫氏二十五世のときに主君を殺して中山王を称していた逆臣利勇を破り、王位についたとある。浦添按司とは浦添の領主で浦添城主ということである。……

初期三王統が浦添の領主から始まっているのを見ると、浦添城が首里城以前の中山王城ではなかったかという考えが生まれてくるのも当然である。そこにはかえって伝説的な真実が含まれているのである。

浦添城は考古学的な発掘調査の結果、最古の遺構は、十三世紀末から十四世紀初めのもので推定されている。首里王府の史書がいう英祖王統の時代(一二六〇～一三四九)に当たる。さらに下層の調査まで進めば、もう一時代さかのぼる可能性もあるという。そうすると舜天王統(一一八七～一二五九)の存在も、ただの架空とはいえない。浦添城跡の東南の続きにある離れ岩(ハナレジー)すなわち別れ岩(ワカリジー)は、舜天王の城の跡であるという伝えがある。『中山世鑑』以来、舜天王は源為朝の子とされているが、地元

の前田では、この岩の上から為朝が弓を引き、矢の落ちたところにまつたのが安里八幡宮であると伝えるなど、為朝とのかかわりも説かれている。もちろんそれは伝説にすぎないが、この離れ岩の地形と浦添城との位置関係とは、琉球神道の立場でみると大変興味深い。岩は城の南東方向にあり、その先は、左右から丘陵の先端がせまり、その間に久高島が横たわっているのが見える。』

●20日朝9時半、首里城へ。

あちこちに目配りしながらも、実はおぼつかない足元にも気配りして階段を上り下り。月に1、2度は自分でお灸が必要な膝も今回は不思議に何の痛みもなく動けたのは本当にありがたかった。

「守禮之邦」(守礼門)を入ってほどなく左側に園比屋武御嶽石門があった。国王も拝礼した安全祈願を行う石門とのこと、一人合掌している。「ここまで来てくださったれば充分です」との心が伝わってきた。しかしこれで帰るわけにもいかず、龍樋をのぞき、残されている龍の彫刻より湧水にひかれた。「誰も分かっていない」という龍神さんの言葉があった。首里城で最も高い「東のアザナ」に立つ。東に向かって拝礼し、雨のためか出発が遅れた飛行機が無事に着けたことを、改めて龍界にお礼も言えた。

●同日午後、対馬丸記念館を訪れた。

対馬丸(貨物船)で何がおこったのか。
「昭和19年(1944)戦争の足音が徐々に近づいてくると、老・幼・婦女子は県外へ疎開するよう指示されました。対馬丸は学童集団疎開の子供たちをたくさん乗せて8月21日に那覇港を出港します。しかし、海はすでに戦場でした。対馬丸は翌22日夜10時過ぎ、米潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃により海に沈められてしまいます。乗船者1788名(船員・兵員含む)のうち約8割の人

びとが海底へと消えてしまいました」と書かれてあり、私は「海底へと消える」という表現に、ものすごい違和感をおぼえました。これでは子供たちの魂まで消えてしまうような表現に感じたからです。

子供たちの悲痛な叫びは今も存在しているではありませんか。

●次の平和祈念公園はずい広い。摩文仁の丘に立った。米軍に追われて行き場を失った女子学徒隊が己の死とどのように向き合ったのか。その時の心に、私の想いを馳せた時「悔しい」という声がハッキリ聞こえてきた。私にとっては意外。死への恐怖、苦しみのようなものではなかった。最後まで「戦っていた」のか!

「この時・この所・この人」が生きた証は消えるものではないらしい。

旅のすべては書き尽くせないが、私にとっては、必然的な旅のようであった。ありがたい。

考えてみれば3泊で島をめぐるのだから、駆け足でバタバタしたものだった。浦添城跡、首里城、対馬丸記念館、平和祈念公園、全学徒隊の碑、韓国人慰霊塔、ひめゆりの塔など書き尽くせない数々の慰霊塔などが建てられていた。立寄る所は少なく、車中からの黙礼ばかりで失礼した。

今確信できるのは、現地に残る魂魄の念いは永遠であること。霊人にたいする「慰霊」「鎮魂」の本質の違いをはっきり自覚できた。

沖繩旅行の余韻冷めやらぬある夜、夕食時に生母(法主母)さんから声が掛かる。「大倭太加天腹に入った者は、食事の度に、沖繩の皆さん」と分けて言う必要はないよ」とのこと。

この一言をお聞きして、改めて私たちの旅の意味が自覚できた。

じんずうりきによせ
「神通力如是」の真意をさぐる

第二十四回

大倭教の源流にさかのぼって

今回は原文と現代語訳を載せた後、「神通力如是」の中で神憑りとして重要な役割りを果たしている矢追妙月(輪孺香)について法主が遺した文章から抜粋して、その人物像を想像していただきたいと思ひます。

原文(「11月18日午前7時半」の続き)

(礼 両手ヲツキ)

「ワレハ中将姫。

中将姫、慎シミ、奇稲田姫命ニオンモノ申シ奉ル。一日モ早ウ吾身ノ罪障、母ノ罪障、ヌグイトリタキ為、オン前ヲケガシ奉ル、何卒オ許シアレ^(頭ヲ上ゲル)。題目。

亡キ母ジャ人、成仏セラレヨ。姫ノ事ハ少シモアンジル事ハゴザリマセヌ。姫ニハ父君ガイラセラレル、ウバモイル。姫唯一ツ悲シキ事ハ太子ノモトニハベル事ノカナハヌノガ一番悲シユゴザリマスル。ソノ太子ノ君モ今ハモウ亡キカズノ人ノ中ニイラセラル。コノ姫ノ心ノウチヲ伝ヘル事モ出来申サズ、セメテ其ノ思ヒ其儘ニ太子ノ君ノ菩提ヲ弔ヒ、後ノ世ニオイテ太子ガ世ニ出テラレル時ハコノ願ヲカナヘテ下サイマセ。母ジャ人、神様ニモオ願申シテ下サイマセ」題目。

「吾ハ、奇稲田姫。

中将姫、汝ハフビンノ者ナルゾ。一日モ早ウ罪障消滅イタセ。今ノ世ハコノ稲田姫ノ情ニヨリ、太子ノモトニハベラセシ也。今世ニ出シ太子ハ国ノ立直シノ大キナ役目、汝モ前ノ世ニ於テ太子ノ為ノ仕事ハ何一ツ手伝ダウ事ガナカリシガ、今ノ世ハソノ思其儘ニ太子ヲ助ケ候ヘ。ワカッタカヤ、中将姫」

(中将姫、礼拝)

「奇稲田姫ノ大神、私事ノ為オン前ケガシ参ラセシニ、一言ノオ叱リモウケ申サズ、有難キオ言葉ノ数々、姫有難クオウケ致シマスル。一日モ早ク吾身ノ罪障ヌグイトリ、イトシキ君ノオン為ニ命ヲ捧ゲオ手伝ヒ申シ上ゲ奉ル。オン前ケガシ参ラセシ罪、何卒オ許シ下サレマセ、オイトマ頂戴仕ル」

現代語訳

(礼をし、両手をついて)

中将姫「私は中将姫です。中将姫は慎んで奇稲田姫命に申し上げます。一日でも早く私自身の罪障と母の罪障をぬぐい取りたい為に、姫様の御前を

けがしますこと、どうぞおゆるし下さいませ。^(頭を下げ)

(題目)

亡くなられた母上、成仏なさって下さい。私のことは少しも心配なさることはありません。私には父上がおられます。また乳母もいます。ただ一つだけ悲しいのは、聖徳太子のおそばにいられないことが最も悲しいことなのです。そしてその太子様も今はもう亡くなってしまわれましたので、この私の心のうちをお伝えすることも出来ません。せめてその太子様をお慕いする心のままに太子様の菩提を弔い、来世にまた、太子様が現界にお生まれになった時には、太子様のもとにいて、お役に立ちたいというこの願いをかなえて下さいますように。お母様、神様にもお願いして下さいませ」(題目)

奇稲田姫「私は奇稲田姫です。中将姫よ、あなたは気の毒な人です。一日でも早く罪障の消滅をなさい。今世は私、稲田姫の情けによって聖徳太子(日聖)のもとで夫婦として暮らせるようになりました。今世に生まれた太子は国を立て直す大きな役目があります。あなたも前世では太子を助ける為の仕事は何一つ出来ませんでした。今世ではその願いどおり太子をお助けなさい。分かりましたか、中将姫」

(中将姫 礼拝)

中将姫「奇稲田姫の大神様、私事の為に御前をけがしましたのに、一言のお叱りを受けることもなく、そればかりか、ありがたい数々のお言葉をいただきました。私はそれらをお受けいたします。

一日でも早く、わが身の罪障をぬぐい取り、愛しき方の為に命を捧げてお手伝いをさせていただきます。御前をけがしました罪、どうぞおゆるし下さいませ。これにて失礼いたします」

矢追妙月（輪孺香）について

大正3年10月2日に大阪の成川家で成川栄三郎としなの間の長女として誕生した成川静枝は、昭和11年3月11日に法主と結婚し、後に矢追妙月と改名している。妙月は霊界からは輪孺香と呼ばれ、現界でも「輪孺香力アさん」と愛称されていたという。

「神通力如是」の前文の中で、法主は、「……今日まで秘めある妙法の功德力と過去の宿因により（※昭和16年）11月6日朝、鳥見庄山なる自宅に於いて輪孺香神通力を許され霊覚を得たり。……輪孺香は宿世の縁によりて……日聖の裏となる。茲に輪孺香に御示顯なし玉ふ日日の御宣託を録し後世に遺さむとす」と彼女の重大なる使命について記している。

今回の「神通力如是」の中でも明らかかなように、輪孺香は中将姫と霊統でつながっており、今世では法主が担う国の立て直しのお役目を助けるようにと奇稲田姫から命じられている。「神通力如是」の中で霊界からの宣託を受ける重要な役割を果たしている輪孺香こと矢追妙月が、法主とのかかわりにおいて、どのような方であったか、法主が遺した文章を通して紹介しておきたい。

※

妙月との結婚とその後について法主は次のような文章を遺している。

《結婚に関しても私は無頓着で親まかせでした。親が「嫁の条件は何かないか」、「好きな人でもお

るのとちがうか」などと聞いてくれましたが、私は「めったに男の嫁さんはいんやろ」と言ってみせきりでした。成川静枝（成川栄三郎氏の長女）との話が持ち上がり、母が神さんにお伺いをたてたところ、赤い舞扇が出て古代大倭の神前で鈴をふって踊っている巫女さんが出たそうです。それで縁ありとみて親が決めて、昭和十一年に親のいう通りに結婚したという次第でした。

嫁いで来てからの妻もやはり神憑りで、今の大倭の聖歌「くにも」とは神懸りで口誦したものを、写しとってできたものです。妻は昭和二十五年に帰幽しましたが、十五年の縁でした。》

（野草社『ながそねの息吹』150頁）

紫陽花邑に移り住んでからの妙月について法主は次のように記している。

《回顧すれば妙月は健康には勝れなかったもので、昼なお暗き屋根裏の片隅にて独り子供等の衣類のつづくりなど、子供の身の廻りの世話をしていた。寒くなればと思つてこの地に遷るとき持つてきたラクダの一枚毛布を細かく切つて、子供等の足袋を作つてくれたことが今も嬉しい記憶の一つである。毎朝子供等が元氣よく「黎明大倭」を斉唱しながら天王山の峠を越えて登校する姿が見えなくなるまで、妙月が外に出て見送つていた姿が、いまだ脳裏に焼き付いて離れない。よくこの貧困生活に命の限り耐えてくれたよき妻だった。惜しんでもなお余りある。》

（野草社『やわらぎの黙示』212頁）

妙月が帰幽したのは前述の仮住居が火災で全焼した次の年のことであった。妙月が病床にあった瑞光庵が台風に襲われた時のことを法主は生々しく記録している。

《九月三日、死者百十三人、全壊家屋六千戸という被害を及ぼしたジェーン台風は、同じ勢いで



この掘立小屋をも襲つたのである。瞬間、異様なうなりと同時に、釘付けではめてあった庵（写真、瑞光庵）の硝子障子が勢いに乗り風雨とともに、産後の病床で横たわつていた私の妻の上へ、いやというほど叩きつけた。この夜痙攣の発作が始まり、六日午後十一時、妻妙月は三十七歳で世界したのである。》

（野草社『やわらぎの黙示』227頁）

※

ここからはしばらく前に発見された、妙月が帰幽した前後の法主のメモを一部整理して紹介しておきたい。まずは昭和25年8月31日のメモで法主は妙月をめぐる因縁についてこう書いている。

《かつて妙月（成川静枝）、日聖の妻になった時、神は「妙月が三十七歳になれば、日妙の後を継いでやるようになる」とお示しがあった。法主祖母キシ、そして母日妙、妙月の三人共五黄の星の生まれという奇しき因縁である。ところで神示の三十七歳が昭和二十五年の五黄のトラ歳。しかるに本年一月妙月妊娠の兆あり、愈々本年より外部に出て活躍すべきだ、岩戸神楽の実相の如く先ず女性が表で踊り、後で手刀男がひかえ、これによって社会に光明が走るので、大倭の行き方はそうあるべきだと語っていた所、二月三月となりたる傾ツワリが強く床に就く。》

ところがこの後、妙月の病状は悪化の一途を辿っていくことになる。法主はその様子をこの病床メモに克明に綴っているが、今回は紙面の都合でその大部分を割愛させていただき、臨終の日である9月6日の部分のみ紹介することにする。

《……夕八時過ぎまでケイレンはなく静かに朝の中は左手を常に動かしていたが、湿布を始めてから静かに布トンの中に入れていた。それより熟睡しやすやすと寝息をかく。午后八時頃からである。十時頃成川の母が見える。十一時頃より息が荒く面相も死相である。もうこれが最後のようと思われる。

今日は朝から意識が少し出たが、側へ行けば目を送り、物と言えば軽くエシヤクをした。両親来た時も分かったらしくエシヤクした。日聖が側に行けば手を出して並べ胸のボタンがはずれていれば片手ではめようとしていじくってみる。鈴月のシャツのホコロビを手で引いて合わせたり思うだけに哀れでいじらしい。今眼前にそのコン睡状態の息を聞きつつ、筆を執っている。(午后十時五分過ぎ六日)

妙月の病状を看視しつつ日聖は最後の湿布に懸命だ。呼吸にそろそろ変化を見せて来た。もう生還の見込なしと思いつつ最後の祓いと祈りを枕辺で静かに行う。更にすやすやと静かに呼吸する。出す呼吸に合わせて音が出た。祈り続ければ又変化があった。脈はしっかりと心臓は強い。暫く見守り、胸に手をあてて霊気でなせる。一呼吸の時間が長くなり眠るが如く臨終を迎えた。時に十一時である。ああ逝く。生を受けて三十七歳。日聖と結婚してより十五年。ここに妙月が享けし一大事因縁を果たして静かに帰幽した。日聖、家麻呂、輪孺美、鈴月、成川貞、日元この臨終の最後を見送った。残る子供四人、末が四歳、することなすこといじ

らしく涙の種である。

誰もが一度は通る常道なんだ。而し愛別離苦の仏語は真理である。ああ今世には再び還らざる妙月、吾妻、十五年の生活を顧みれば唯涙、感謝の心に満ち満ちている。一日として世間並の夫婦生活はなかった。だが常に日聖の使命を自覚し、日聖に裏から協力しあらゆる困苦欠乏に堪えてよく身終わるまで妙月の使命を完うしてくれた不動の信念、大倭教教母としての円満な博愛精神に生きぬいてくれた妙月の魂が帰幽と同時にありありと思わされて来る。

人間的修行の足らざる点は多々あり、臨終まで修養だと日聖の信念に基づき妙月には妻としての又夫としてやさしき言葉も掛けたことなく日聖口を開けば妙月の足らざるを教え叱る外なかった。骸の前に謹みて謝す。だが妙月には常によく分かってきた筈なんだ。東京の生活、大倭教創立に際し又菅谷の地に居を移して以来の苦闘等、日常生活を思えば唯感慨無量、涙あるのみである。

日聖が伸びることはそれだけ妙月の影の力が働いていることだ。十五年間の妙月の残せし足跡を日聖は完全に開頭しその霊を慰めたい。如何にあきらめても胸の底にやるせなき一雲が去り難い。胸のつまる思いも時にはある。だが直ぐに発散してくれる。これ妙月の霊が幽界より慰めに見えているらしい。冥福を祈る。(七日朝記す)》

妙月が帰幽した翌朝に法主はこのように切々と思いを綴っていたのである。その5日後の9月12日に初七日として日霊祭を執り行った日に法主は次のように記録している。

《鈴月、午后暮参に詣る。鈴月に示し給う霊示。実相。鈴月、雨の中なる故、ミノ、傘で詣る。墓前にて先ず合掌。「大倭教教母妙月須寿(輪孺)

香姫命」と呼び祈り始む。時に両手強く前方に引きつけられ、色とりどりの草花にうずまわって妙月ニコヤカに微笑し天女の如く輝いていた。特にコスモスの花が目立っていたと。妙月、生前コスモスが好きだったからだろう。暫くしてから墓標がぐんぐん高く高く天に延び、その度毎に鈴月の頭が上へ上へと向いて行った。終に天を仰いで両手をさし延べて祈る。思うにこれ今より妙月の仁徳世に弘まり、人々をして高く仰がしむ実相ならん。夜、日聖と鈴月、家内の霊前にて日霊祭を行う。祈りの声を聞いて、日元を始め子供が参列した。お祈りの最中、鈴月に示し給う実相。「大きい満月がおもむろに浮かび上がって来て明恍々とし実に美観を呈していた」と芽出度い実相である。妙月に替わって鈴月が又神憑りになるような下準備と思われる。

鈴月が墓参に行ったあと、日聖は少し疲れたのか机の側で横になった。雨もりが枕辺で受けた器の中でポトリポトリと音を立てていた。眠るとなく起きるとなき、うつつの世界の時、妙月に関しての色々の神示があった。その主なるものは字にて「昭和二十五年三月二十五日」と見えた。この日が妙月の定命のつき日だった。然し妊娠三ヶ月であった為か、八月に安産し九月六日に帰幽したもので、これも信仰の徳、過去世の罪障を之によって消滅したものである。妙月の前世も子を授かって死せし因縁があることは現世の現象によって明らかである。而しその因縁は今世を以て断たれ誠に芽出度い。……》

※ 「神通力如是」の中で神憑りとして重要な役割を果たしている輪孺香こと矢追妙月がどのような方であったか、読者の皆様の理解の一助になればさいわいである。

あじさい日誌

2月9日 午後1時40分まず法主奥津城でご挨拶の後、2時から拝殿において法主帰幽祭が行われました。写真は挨拶する紫陽花臣代表の矢追明昌さん。



この日は平成3年12月23日、法主さま満80歳の降誕祭の法話映像を見て頂きました。法話は平成30年12月号『おやまと』に「やわらぎの黙示」出版記念」として掲載分です。

2月12日 午後2時から拝殿で大倭会主催の祓会。出口三平さんが久しぶりに、また藤本宏秋さんに誘われ玉木志保美（京都府舞鶴市）・森下佳代さん（京丹後市）が参加されました。
2月15日 大倭神宮月次祭。
2月19日 午後、交流の家でFIWC定例委員会でした。

2月23日 午後1時20分大倭神宮で申孝祭が行われ、続いて2時から紫陽花臣の拝殿において月次祭が行われました。

この日は昭和37年2月23日の法話をお聞きしました。平成17

年3月号「申孝祭の精神を汲み取ってほしい」として掲載分。
3月5日 第1日曜日で午前9時より大倭墓地掃除が行われました。

3月6日 大倭神宮月次祭。午後6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では
3月6日 矢追家麻呂教長さんに新しい公用車のお清めをして頂きました。
（菅原園）

3月6日 今まで長く使用していたキャラバンから新車のハイエースに替わりました。通所の送迎を中心にドライブサークル等でも使う予定です。
（須加宮寮）

2月27日 皆で一緒に花の球根を植えました。何色の花が咲くのか楽しみです。
（長曾根寮）

2月23日（デイ）今回は非常にクオリティが高い飾りを作りました。

2月（特養）2月のカレンダーとして皆で、今日は何の日・奈良の催し・季節の写真・誕生日の方の紹介を作成しました。
（茂毛菴園）

2月14日 バレンタインデーで、おやつ時にチョコプレート菓子を女性職員から男性ご入居者へ手渡しました。
（八重垣園）

変わりない日々です。

波紋

林修三

「神通力如是」の余話として今回掲載の第24回「神通力如是」では、かくして中将姫の願った太子を助けるという前世での願いは見事にかなえられ、数々の困難を乗り越えられた妙月母さんは、今は仏界におられるという。

この因縁譚は一つの世では終わらないという人の、その大きな生き方を教えてくれる。誰もがわからないが、連続として続く過去世からの因縁を背負って、この現世へと再生して行くのだ。私にも難しすぎてハッキリとはわからないが、何か心の奥底で納得できるものもある。

大倭会通信

コロナの流行もやや下火になつてきた様子で一息ついていますが、皆さまお元気でしょうか。

▼昨秋に開催した2泊3日の佐渡への文化行事は好評で、参加したお一人お一人の中に深い余韻が残ったようです。今年も秋の宿泊文化行事に向けて担当者たちが着々と構想を練っているので楽しみにして下さい。

コロナ禍のためにしばらく中断していた日帰りの文化行事も、来る5月21日（日）をメドに再開する予定です。詳しくは本紙4月号で案内いたします。

人はこの世に生を受けた時に、すでに各々の個人差を持っている。体格、能力、環境、好み等々。植物に例えれば、その種ともなる因は、どこから来るのか？ 又、選ばれた土壌（環境）はどのようにして決められるのか？ 因は縁をよび、その人の人生を形作っていく。幸せな、あるいは不幸な……。

もしこのような因と縁が織りなす生きざまが存在するならば、それは果を得て、次の世の因となる報へと続くのだろう。そしてそれは転生を繰り返す証ともなる。

ともあれ、考えれば恐ろしい因縁譚も、櫛田稲姫尊という自然神に繋がる人格神の温かな情によって救われていった。

~~~~~  
▼また、3年間も中止を余儀なくされていた文化講演会も、今年には開催すべく準備が進んでいます。今のところの予定では、11月12日（日）にゴリラ学者として有名な前京都大学総長の山極壽一さんが講師を内諾して下さいます。鋭い文明論も展開されている山極さんが、大倭でどのようなお話しをして下さるか期待がふくらみます。

▼毎月の祓会では、拝殿でゆっくりと時間をかけて語り合っていますので、時間とお気持ちのある方はぜひ参加して下さい。  
（岸田哲）

## 編集後記

大倭教の立教開宣から10年余り、今から66年ほど前の新聞の再録記事ですが、邪教邪道の素人鑑定法など、思わず笑いたくなるほど今日でも参考になりそうではありませんか。（春）

## あんない

\* 月次祭（大倭神宮）  
4月6日（木） 午後2時より大倭神宮にて。

\* 須佐緒祭（大本宮）  
4月8日（土） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。恒例の園遊会は中止とします。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐（結び）の緒に感謝をするお祭りです。

\* 大倭会主催祓会  
4月9日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\* 箭負祭（大倭神宮）  
4月15日（土） 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮ります登美の神奈備（大倭神宮）の靈威を法主日聖大恩師の遠祖（箭負氏）が代々祭祀し、神仕えてきたことを記念するお祭りです。

\* 月次祭（大本宮）  
4月23日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

（岸田哲）